

どんなに重度の障害があっても地域で暮らせる社会を！

DPI日本会議 事務局長
尾上 浩二

1

自己紹介1－養護学校・施設で

- 仮死早産で生まれ、一歳で脳性マヒと診断される。下肢痙直型タイプ？
- 小学校を養護学校、施設で過ごす。
- 児童相談所と親で勝手に決まった施設入所～入所一週間前に知らされる
- 本を持っていこうと思ったら持ち物制限で不可に
- 「51番 尾上浩二」の名札が上着から下着まで
- 強烈だった手術と就寝時の訓練

2

自己紹介2－施設から普通学校へ

- 普通中学校へ転校する時に支えとなった一部の施設職員、養護学校の教師
- 「特別扱いはしない」を条件に「設備、先生の援助、子供たちの手を借りないこと」
- 友だちと街に一広がった外出、生活経験
- 高校時代に悩むが、障害者として相談できる所はなかった。
- 大学に入って障害者運動の先輩と出会う

3

当事者発で始まった地域生活

- 1970年代 「そよ風のように街に出よう！」、共同保育、地域の普通学校入学運動
- 1984年 当事者が運営する初の作業所
- 1986年 大阪市全身性障害者介護人派遣事業
- 1989年 大阪市独自のグループホーム制度
- 1992年 大阪府福祉のまちづくり条例
- 1998年 自立生活センター・ナビ設立

4

自立生活センター・ナビ玄関



一般の民家を改造して



6

自立生活センター・ナビ 奥は相談室



7

ホーム用エレベーターで2階に



8

赤おにー社会活動の場として



9

当事者の必要に応じた多様な活動

- 自立生活センター・ナビーピアによる相談支援
- 赤おに、青おに作業所ー多様な社会活動・日中活動の場として
- ヘルプセンター・ステッパー一人ひとりのニーズに合わせた介護
- 2ヶ所のグループホームー施設から地域生活へのステップとして
- 地域生活・権利確立を目指した当事者活動

10

人工呼吸器を使ったAさん

- ALS(筋萎縮性側索硬化症)障害のため全面介護が必要。妻、子どもと同居。気管切開をしており人工呼吸器を使用。2000年夏に、介護保険のケアマネジャーを通じて相談
- ピアカウンセラーが訪問ー障害の進行の中でいらだちを訴えられる。緊急性を要する介護派遣や自立生活プログラム
- 「子どもが小学校に上がる姿をみたい」ー重要なターゲットイメージ

11

呼吸器を使ってー奥さん、娘さん達と



重度のろう重複障害を持って

- Bさんー就学前から肢体不自由施設や療育園
- 施設では聴覚障害があることすら周りも分からないまま、天井を見て過ごす
- ある施設では、ご飯・おかず・薬を混ぜた「食事」
- 大阪市初の身体障害者グループホームに入居
- GHでの生活経験と支援体制を元に一人暮らし
- 重度の脳性マヒと聴覚障害のために手話や文字盤を使ってコミュニケーション

13

重度の聴覚・言語障害と全身性障害



14

児童施設・療護施設から地域生活

- Cさんー8歳の時から肢体不自由児施設。「過齡児」となり、20歳から療護施設へ
- 「グループホームに入りたい」と相談
- 自立生活プログラム、体験自立で地域生活のイメージを具体的に
- 施設からの地域移行モデル事業に参加
- 親族と音信不通一家を借りる時の保証人

15

子供の時から20年の施設生活を経て



16

青おにー障害者の働く場を目指して



17

パソコンを使って仕事を



18

さあ、これから営業開始



19

ピアサポート、体験的エンパワメント

- ピアカウンセリングの中から
 - ・「どうしたら施設から出れるか分からなかった」「子どもの時から施設やから、このままやったら一生施設かな...」
- 自立生活プログラムで自立のイメージを明確に
 - ・「私の旅行計画」
 - ・「先輩の自立障害者宅を訪ねて」
 - ・「ウィークリーマンションを借りて自立体験」

20

私の旅行計画—のぞみで東京へ！



21

初めて乗るエスカルにドキドキ



あこがれのミッキーと一緒に



23

星に願いを—地域で暮らせるように



24

先輩の自立障害者宅で質問



25

修了証授与—お疲れさまでした



Cさんの自立支援をふりかえって

- ピアカウンセリングの中で、「施設から出て、地域で暮らしたい」という思いを確認
- 平行して、自立生活プログラムに参加する中で、「地域での自立」のイメージを具体化
- 「ウィークリーマンションでの自立体験」で「自分の生活と介護体制」を確かめて
- 施設との協力・連携—届け出制の「電動車いすでの外出」、「自立体験」時の時の協力、食費代
- 大阪市地域移行モデル事業の意義
- 地域での住まい確保策の必要性

27

障害者ニードは社会資源開発の力

- 重度障害者の地域生活は、何もない中から当事者・地域発で始まった
- 1990年代に地域生活サービスの制度が自治体レベルで徐々に整備されてきた
- 2003年の支援費制度は地域生活サービスを全国化するきっかけに
- 「支援する側—される側」という役割固定を超えて—社会資源開発・権利擁護活動の力に

28